

分科会総括研究報告

東北大学医学部産科学婦人科学教室

鈴木雅洲

○研究目的および方法

この研究の目的は、胎児障害すなわち胎児死亡・胎児先天異常・胎児疾患・子宮内発育遅延・流産などが、社会の最近の変化に伴った生活環境・社会構造・医療によって如何なる影響をうけるかを調査する目的で行なわれた。この成果は、将来の母子衛生行政に重大な示唆を与えるものと思われる。この研究の方法は、疫学調査に重点をおき、また必要な臨床検査を行ない、データは統計学的処理を行なった。

○研究成績の要約

1. 肥満

約11,700例の妊産婦について、厚生省国民栄養調査による身長別体重表から肥満度を検討した結果、肥満度が高い妊婦では、妊娠中毒症と糖尿病と過期産の発生率、および帝王切開率が高く、またLGAに頻度も高かった。一方、るいそう妊婦では、切迫流産の頻度とSGAの発生率が高い傾向にあった。分娩時出血量は、肥満産婦、るいそう産婦ともに増加する傾向にあった。

肥満妊婦管理には妊娠前の体重のコントロールと共に妊娠中の適切な体重増加に対する指導の必要性があると考えられた。

2. 核家族

11,642例について子供の数、住居形態(一戸建 or ビル)、職業の有無を対応させ、核家族と夫の両親と同居した群の間で比較した結果、職業なしの場合には、夫の両親との同居でつわりの発生頻度がやや高かった。職業なしの場合には、夫の両親との同居で36週以前の早産が少ない傾向が見られた。産科手術を要する分娩例が、職業なしの場合、核家族で高い傾向がみられた。職業なしの場合、夫の両親との同居で、新生児Apgar score ≤ 7 の頻度が低い傾向が見られた。

3. 勤労婦人

有職婦人妊婦3,689人、家庭婦人妊婦8,345人の計12,034人について検討を行った。妊娠前の月経不順は有職婦人が家庭婦人より有意に多かった。職種別では保母、美・理容師に家庭婦人より高い傾向を認めた。流・早産は有職婦人で有意に多かった。有職婦人では家庭婦人に比べ、自然分娩率は少なく、吸引分娩、帝王切開が多い傾向にあり、また骨盤位牽引術も多かった。新生児体重に関しては、有職婦人では家庭婦人に比しSGAが多く、LGAが少なかったが、とくにSGAは8時間以下の就労有職者で特に顕著であった。また、新生児の異常に関しては、有職婦人に新生児仮死(Apgar7点以下)がやや高かったが、重症黄疸、呼吸障害、嘔吐、先天奇形は有意差がなかった。

4. 旅行

12,477例について検討した結果、妊娠中の旅行は37.2%で、里帰り分娩は8.5%にみられた。対照群に比べ旅行群で切迫流産、自然流産が有意に低く($P < 0.01$)、切迫早産も低率で有意差を認めた($P < 0.05$)。里帰り分娩群でも切迫流産・切迫早産が有意に低かった($P < 0.01$)。また、対照群に比べ旅行群、里帰り分娩群ともに自然分娩が有意に高かった($P < 0.01$)。旅行群、里帰り分娩群とともに死産が低率であった。奇形は、対照群に比べ旅行群で有意に高かった($P < 0.01$)

以上の調査成績から、旅行なし群に比べむしろ旅行群に異常発症頻度が少なく、旅行は妊娠、分娩、胎児に大きな影響を及ぼさないと考えられる。

5. カフェイン

コーヒー並びに抹茶飲用妊婦15,142例及び対照群5,336例について分析した。低体重児出生の発生頻度にはコー

ヒー1日5杯以上の妊婦と1日4杯以下+抹茶7杯/週以上の妊婦に、(対照群に比して)有意($P < 0.0001$)に高く認められた。流産率もコーヒー飲用妊婦とコーヒー・抹茶飲用妊婦に有意に($P < 0.0001$)高く認められた。奇形児の発生頻度は有意差が認められなかった。

6. 冷房

11,964例について検討し、平均冷房時間は1日3~4時間が最も多かった。流・早産の頻度、妊娠中毒症の発症率、早産率、周産期死亡率、アプガールスコア、2500g以下の低出生体重児の発生率などは、冷房使用群が非使用群に比して有意に低かった。

7. 交通機関

交通機関を利用した妊婦は、8,899例中、4,162例であった。交通機関利用妊婦に、流産、妊娠中毒症、低出生体重児及び骨盤位率手術の頻度が高かった。

8. 居住条件

11,777例の妊婦中、ビル居住は4,688例あった。妊娠中毒症と貧血が、1階居住者に比べビル5階に居住しエレベーターを使用していないものに多かった。一般にビル4,5階に居住しエレベーターを使用していないところに切迫流・早産、自然流産、前期破水がやや高い値を示した。

9. 輸血

A. 輸血の影響

80,267例について、抗赤血球不規則同種抗体のスクリーニングおよび、同定を施行した。妊婦20,216例中283例(1.40%)で、輸血される患者より不規則同種抗体保有率が高かった。抗体保有産婦では、抗-Dが最もその頻度が高く、重篤であって、抗-Eがこれに次ぐ。抗-Lewis抗体はその数は多いが、新生児溶血性疾患をおこすことはない。

B. 交換輸血、輸血を受けた児の長期予後

比較的長期間後の副作用は77例でHB抗原陽性24例、その他の肝障害20例、サイトメガロウィルス感染14例、不規則抗体陽性10例、などであった。輸血(交換輸血を除く)の供血源としては家族、親戚が占める比率が高かった。

10. 妊娠期の栄養の実態と保健指導

正常妊婦150例、貧血妊婦45例、中毒症妊婦15例について、栄養実態調査を行なった。妊娠後半期では正常、貧血、中毒症の妊婦でCa、Feは不足しており、充足率はCaが約80%、Feが約60%であった。また、妊娠後半期の妊婦約20例につき、亜鉛および銅の摂取量を概算した。亜鉛摂取量は約28mg/日であるが、その約半量は緑茶に由来し、緑茶を全く摂取しない妊婦では亜鉛摂取不足になる可能性が示唆された。銅の摂取量は約1.7mg/日であった。

また、分娩時の母体血中亜鉛および銅はSFD児分娩群ではAFD群に比べ、いずれも有意($P < 0.02$)の低値を示した。

11. 乳児に見られるビタミンK欠乏性出血性素因に関する研究

1,918例の児を対象として、ビタミンK₂シロップ予防投与法を検討した。

VK₂シロップ投与法のいかにかわからず、母乳栄養児1,029例のHpt値は68.0±12.3%、混合・人工栄養児889例のHpt値は66.9±11.4%に分散し、各投与群の間に有意差は見られなかった。Hpt値40%未満の症例は、母乳栄養児の0.4%、混合、人工栄養児の0.2%にみられ、非投与群2.4%、1.4%に比し有意に減少した。また、20%未満の危険域にある症例は、1例も見られなかった。

VK₂シロップの内服は、Hpt値の分散を有意に高めることは出来なかったが、40%未満の例を有意に減少させ、20%未満の症例をなくすことが可能であった。

12. 妊娠週数ならびに出生体重からみた早期新生児死亡率ならびにその対策に関する研究

胎児発育曲線は従来ルプチェンコや船川の曲線が用いられていたが、10数年以前のものであり、今回、最新の61,662例の多数例について胎児発育曲線を作成した。早期新生児死亡数390例(6.3:死亡率)、新生児死亡数447(7.2:死亡率)、乳児死亡率564(9.1:死亡率)で、各々の死亡率曲線を作成した。これらの曲線により、出生体重、

妊娠週数から、その児の予後が推測できることから、この曲線は、過去の何の曲線よりも実用的であり、我国の母子衛生における重要な基本的資料となるであろう。

13. 21世紀において予測される家庭像と、それに影響を与えると考えられる諸要因についての研究

わが国では、最近、全世帯の60%までがいわゆる核家族となった。世帯構成人数は今後更に減少して行くと予測されている。また最近では、離婚数が著しく増加し、母子世帯や父子世帯のような不完全型の核家族が問題となって来ている。一方、社会全体では、都市化、情報化、高令化、高学歴化などの勢いがいよいよ促進されると思われ、この傾向は個人個人の意識を一層個人主義化させる要因である。今日までは、個の独立、個人のめざめが、戦後の社会的発展を促進して来た点も否めないが、今後は、社会全体として世代間の断絶を埋めることのできる調和的な意識を育てることが重要になって来る。

14. 思春期保健衛生

A. 思春期医学ならびに保健のカバーすべき領域の設定に関する研究

小、中学校での性的発育、内分泌的变化の調査研究と、いこの電話などでの行動学的調査を行った。行動、心理学的問題と身体的問題とが表裏一体の密接な関係にあること、家庭に問題の多いことなどが顕著である。

○具体的対策の検討

イ) デリバリ・システム：思春期の保健に係わるサービス機関および地域団体は既存のものだけで多種かつ多数ある。にもかかわらずよく機能していないのは、現在起きている問題を直視していない、受身的である、カウンセリング能力など質的問題、地域として統一されていない、などのため、これを解決する統括的なシステムを種々検討した。

ロ) マンパワー：医学関係者に対しては、思春期保健を家庭保健の一部と位置づけ、早期教育する。心理、社会面では学士、修士コースに1年位の思春期コースを追加する。

ハ) モデルプログラム：正常を増進するプログラムと異常に対応するプログラムを作成した。

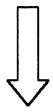
B. 10代婦人の妊娠

20才未満の分娩2,323例について検討した。年令別、結婚状態別にみた妊婦検診回数および初回受診時期は、年令が若いほど、また結婚していない群ほど不良であった。妊娠中毒症、低出生体重児の率も、若年、未婚群に多かった。児の養育状態は若年ほど施設に預けるものが多く、高令ほど結婚して育てるものが多いが、自分で育てるものがこれに次ぐ。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的および方法

この研究の目的は、胎児障害すなわち胎児死亡・胎児先天異常・胎児疾患・子宮内発育遅延・流産などが、社会の最近の変化に伴った生活環境・社会構造・医療によって如何なる影響をうけるかを調査する目的で行なわれた。この成果は、将来の母子衛生行政に重大な示唆を与えるものと思われる。この研究の方法は、疫学調査に重点をおき、また必要な臨床検査を行ない、データは統計学的処理を行なった。